

2019 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	特別支援教育における情報モラル教育プログラムの開発と評価 ーネット・コミュニケーションに着目してー
キーワード	①情報モラル教育、②特別支援教育、③教育プログラム開発

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	サカイ キョウヘイ 酒井 郷平	所属等	東洋英和女学院大学 国際社会学部 助教
プロフィール	静岡大学大学院教育学研究科にて博士（教育学）の学位を取得後、現職。主に教育工学の視点から小中高生のネットに関する情報モラルや情報リテラシーについて、適切な行動を促すための教育プログラム開発や調査研究を行っています。また、モラル（道徳）教育やキャリア教育などの教科横断的な内容を教えていくための教員養成についても関心を持っています。		

1. 研究の概要

近年、特別な支援を要する子どもの情報機器利用に関するトラブルが報告されており、特別支援教育における情報モラル教育の必要性が指摘される。しかしながら、現状では特別支援教育での活用を想定した情報モラルに関する教育プログラムは充実しているとは言えない。特に、我が国の ICT 環境の整備がされている中で、インターネット上でのコミュニケーション（以下、ネット・コミュニケーション）に関するトラブルについては、早急に対応する必要がある。

そこで、本研究では、(1) 特別な支援を要する子どもを対象としたネット・コミュニケーションに着目した情報モラル教育プログラムの開発、(2) 特別な支援を要する子どもを対象としたネット・コミュニケーションに着目した情報モラル教育プログラムの実践、(3) 特別な支援を要する子どもを対象としたネット・コミュニケーションに着目した情報モラル教育プログラムの評価の3つのフェーズにより研究を行った。

その結果、開発された教材を通して、対象とした子どもたちのインターネットを活用するための自信や学習への意欲を持たせることができたことから、本研究で開発した教育プログラムは特別支援教育において有効であることが示唆された。

2. 研究の動機、目的

最近では、特別な支援を必要とする子どもたちがネット・コミュニケーションの被害者や加害者になるケースが報告されている（文部科学省 2010）。こうした点から、知的障害により特別な支援を必要とする子どもたちに対して、適切な情報社会へのかかわり方を学習するための「情報モラル教育」を行う必要性が指摘されるが、現状、十分な教育プログラムが開発されていないという課題が指摘される。さらに、これからの情報社会の進展を考えると子どもたちにインターネットを「使わせない」という指導は難しく、ネット・コミュニケーションのトラブルを回避するためのスキルを身に付けさせることは非常に重要である。

また、特別な支援を必要とする子どもたちは日常生活において、ネット・コミュニケーションの機会が限られており、日常生活の経験からネット・コミュニケーションの特性を学習する機会が少ない。そのため、わずかな判断ミスや誤解が重大なネット・コミュニケーションのトラブルへつながる危険をはらんでいる。こうしたことから、特別支援教育において、より経験的に学習することができる効果的な情報モラル教育プログラムを開発することが急務であ

ると考えられる。

そこで、本研究では、特別な支援を要する子どもを対象として、ネット上でのコミュニケーションを想定したネット版ソーシャル・スキル・トレーニングの視点を取り入れた情報モラル教育プログラムの開発し、特別支援教育における有効性について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の結果

教育プログラムの開発にあたり、主に 2 つの知見を援用することとした。1 つ目は、ソーシャル・スキル・トレーニング(SST)である。この理論について、原田(2018)は、道徳教育の一環として SST を行うことについて相手の立場を思いやった行為の発達を促進する方法としての有効性について述べており、情報モラル教育においても援用可能であると考えた。

2 つ目は、酒井ら(2016)のカードを用いた分類・他者との比較を行う方法である。子どもたちが自己の SNS 利用におけるコミュニケーションの問題点を把握できるという指摘に加え、知的障害のある子どもの意見の確立や他者との比較のためには、カードによる視覚化は有効であると考えられる。これらの知見に基づき、スライド・カード・ワークシート等の教材をパッケージ化した教育プログラムを開発した。

開発した教育プログラムについて、S 市の特別支援学校高等部 1 年生～3 年生(19 名)を対象に実践を行った。また、教育プログラムの評価を行うため、実践後に生徒や教員へのアンケート、及び発話などから分析を行った。その結果、「あなたは今後、ネットや SNS でのコミュニケーションをもっと学ぶ必要があると思いますか？」という設問について、教育プログラム実践の事前に比べて、事後では有意に得点の上昇がみられた。つまり、教育プログラムを通じて、自らのネット・コミュニケーションに関する課題を発見できたと想定される。また、実施した教育プログラムについて、「今後の生活の役に立つ」と肯定的に回答した生徒の割合が 90%となっており、日常生活への応用ができる教育プログラムであったと考えられる。

他方、教員へのヒアリングの結果、「SNS を使用しない人たちへの説明をどこまで深めるかが難しい」、「一部の表現が生徒によってはピンと来ていないところもあった」という回答が得られたことから、「日常生活においてネット・コミュニケーションを利用していない生徒」や「教育プログラム内で使用する語句について丁寧に解説する必要性」などの課題も明らかとなった。こうした課題は、今後の教育プログラム開発の改良に役立てていきたい。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究では、特別支援学校を対象とした教育プログラムの開発を目的としたが、学校現場全体の課題として、子どもたちの情報モラルをどのように指導していくかという点は克服されていない。特に、情報モラル教育の学習経験がある子どもがインターネットに関するトラブルに巻き込まれる場合があるように、情報モラル教育として学習した内容を日常のインターネット利用へ反映しきれていないということが課題として挙げられる。そこで、今後は本研究で得られた知見をさらに発展させ、子どもたちの日常の「行動変容」や「リスクマネジメント」へつなげられるような情報モラル教育プログラムの開発に取り組んでいきたい。それと同時に、学校現場で子どもたちに適切な情報モラル教育を行える学校教員養成の方法についても検討していきたいと考える。

5. 社会に対するメッセージ

学校現場における情報環境の整備状況やスマートフォン利用率を勘案すれば、これからの社会を担う子どもたちにとって、インターネットは今以上に身近なものになっていくと考えられます。こうした動きは便利さをもたらす一方で、新たなトラブルを生み出すきっかけにもなります。この中で適切に生きていくためにも、子どもたちに情報モラルを身につけさせることは非常に重要になると考えます。本奨励金では、微力ながらもこうした取り組みへの一助となる研究を行うことができました。この場をお借りし、ご支援いただきました関係者の皆様に心より御礼申し上げます。